

夢球児と挑む

県内高校の監督たち ③

役割の自覚促し全員野球

も作戦担当などの役割を任せられ、総力で勝利を目指した。

柳沢監督は2年生から三塁コーチを担った。内野手だったが、「レギュラーは厳しい自覚があり、チームに貢献できる役目なら戸惑いはなかつた。

た。練習試合での気付きや映像分析を通して県内有力投手の癖を収集。書き記した紙は、数えられないくらいあった。

3年夏は準決勝で佐久長聖高に惜敗。「自分の分析の精度が甘かったから負けた。そんな悔いがずっとあった」という。引退後も資料整理との名目で部活動に顔を出し続けた。「後悔を晴らしたい。経験も無駄にしたい」と指導者を志すようになった。

高崎商科大(群馬)に進学し、講義が終われば母校で学生コーチとして指導。卒業と同時に地球環境高の監督となり、12年春の甲子園に出たかつての強豪の立て直しを図っている。

その試合で応援に駆けつけたのは、ボランティア活動を通じて交流を深めてきた人たちだ。振り返れば、小諸商高も試合とあれば地域住民が駆けつけた。「応援はうれしかったし、頑張る原動力の一つだった。少しずつではあるものの、地球環境もあの時の小諸商に近づきつつあるのかな」。手を重ねることに、手応えは深まっている。

小諸商高のような「ベンチ全員で戦うチーム」が理想だ。ブルペンキャッチャーには継投策も考えさせる。「継投は準備が必要。それらのタイミングを見極めるため、真剣に試合を見てほしい」と意図を語る。

一方で、地域のボランティア活動や催しには選手を積極的に参加させた。将来を見越して社交性を磨く狙いに加え、「地

域との交流を通じた選手の成長を喜ぶ地球環境高の柳沢監督

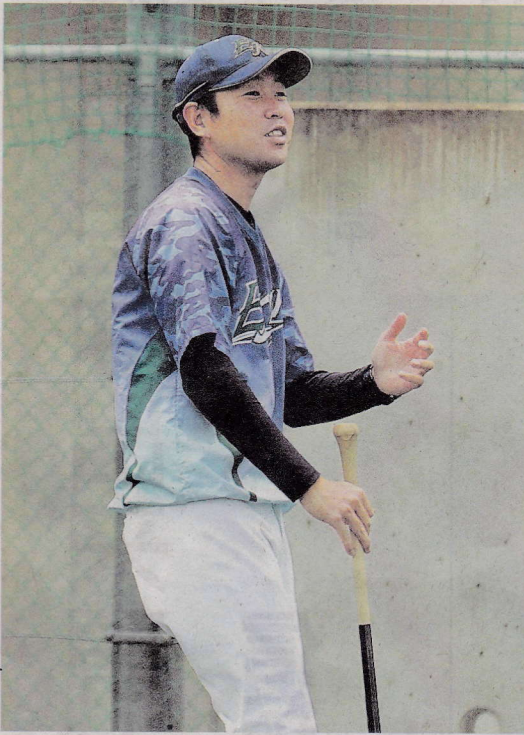
域の人と触れ合い、球児は多くの人に見られている存在だと気づいてほしいかった」。役割を務める上で重要な「自覚」を選手に植え付けた。主将の岩田恭典(3年)は「一人任せにしない仲間が増えてきている」と語る。春の東信予選では、20年の代替大会以来となる公式戦白星を挙げた。

(千野 裕理)

東御市出身。小諸商高で「原点」と語る3年間を過ごした。当時の監督の竹峰慎一さん(現長野商高教)が掲げたのは「全員野球」。ベンチの選手

地球環境 柳沢 翔太さん(26)

地域から応援されるチームへ



地域との交流を通じた選手の成長を喜ぶ地球環境高の柳沢監督